

令和7年度第1回北海道立帯広美術館協議会議事録

- 1 日 時 令和7年（2025年）8月6日（水） 14時10分から15時30分
- 2 会 場 北海道立帯広美術館 講堂
- 3 出席委員 加賀学（会長）、笹島香織（副会長）、石崎庸之、梅田雅則、後藤眞美子（オンライン参加）、佐々木宰、佐藤寛之、柴田勇一、嶋健、富永彰子（オンライン参加）、持田誠計 11名
- 4 事務局 野上義秀（館長）、西巻信吾（副館長）、瀬戸厚志（学芸課長）、野本寛（主査）、野田佳奈子（主任学芸員）、鎌田大遙（主事）
- 5 傍聴者 なし
- 6 議 事
展示会観覧、館長挨拶、委員・職員紹介の後、議事に入る。
(1) 会長・副会長の選任について
(2) 令和6年度事業の実施状況及び美術館評価について
(3) 令和7年度事業の運営計画及び実施状況等について
(4) 高校生等の美術館等利用促進重点期間の設定について
(5) 協議・意見交換
- 7 議事録
(1) 会長・副会長の選任について
事務局案を提示し、会長に加賀委員、副会長に笹島委員を選任。
(2) 令和6年度事業の実施状況及び美術館評価について
(2) について、事務局より説明及び委員からの質問に対し、事務局から回答。
会 長：評価調書の「指標の判定」欄では、白い丸数字と黒い丸数字があるが、違いは何か？
事 務 局：白い丸数字は数値目標を設定している定量評価、黒い丸数字は数値では計ることが難しいものを取組状況により判断する定性評価の判定を示している。指標の種類を色で分けている。
梅田委員：資料には色々と詳細に書かれているが、詳しく知るためにもこの資料は公表されているのか？
事 務 局：評価調書については、北海道教育委員会のホームページで公表している。また、本日の全ての資料は、PDFデータにして各委員にお送りしているので、そちらも活用いただけたらと思う。
(3) 令和7年度事業の運営計画及び実施状況等について
(3) について、事務局より説明及び委員からの質問に対し、事務局から回答。
委 員：目標値設定において、観覧者に占めるリピーターの割合と児童生徒の割合については、

目標の達成に向けた具体的な方向性や改善点など、現段階で検討していることはあるか？

事務局：具体的な取組については、これから色々な数字の分析を行ってから検討したいと考えている。その背景として、そもそも検討の土台となるアンケート数の問題がある。私たちはアンケートをよく分析しているが、アンケートの回答数そのものが非常に少ない。大きな展覧会があればアンケートの回答数も多いが、過去の状況を分析してみると、アンケートへの回答数は観覧者数に対して1%程度となっており、アンケート結果を活用するにはアンケート数そのものに疑義を感じている。このため、まずは、アンケート回収率を高め、より実態を把握した上で、何に取り組んでいくべきなのかを考えることが、今は大切ではないかと感じている。

委員：以前もアンケートに関する議論があり、帯広美術館では展示室の出口にアンケート用紙を置き、回収しているという話だった。他の美術館等で行われている入館時にアンケート用紙をお渡しして、かつ、QRコードで回収するところも増えてきているので、そうした方法も併用して母数を増やすのが必要ではないか。従来型の方法では今は回答しない人が多いのでデジタルでの回収方法と併用していかないと回収率の向上は見込めないと思う。これは博物館協議会でも最近話題になるが、リピーター制度のようなアンケートは来ない人に向けたアンケートなので、市内の学校や博物館に足を運ばないところにアンケートを行わないと本当の声にはならない。その辺りの声の回収方法を工夫しなければならないと思う。本町の博物館でも町内の小中学校に、博物館に自主的に来る人と来ない人を対象にアンケートを実施している。（博物館に）来た人にアンケートを行うと、来た人の回答にバランスが寄ってしまう。また、本州ではスーパーマーケットなどでアンケートを行ってみたり、そうした方法も併用していかないと、一般的な分析にはならないのかと思うので、具体的な検討を進めていただければと思う。展示活動の充実になるが、展示の資材を環境配慮型の展示資材にすることが全国的にも進んでいる。展示パネルの脱プラスチック化だが、従来行われていたハレパネ素材から再生素材への変更など、そうした取組が進められているので、その辺りもぜひ、目標値を立てて、具体的な改善を図っていかれるようにすると、美術館活動の充実にも繋がるのではないかなと思うので、検討いただければと思う。

事務局：ただ今教えていただいた方法も含め、ニーズの把握方法を今後とも検討してまいりたい。

委員：国立アトリサーチセンターが15歳から25歳までの若者を対象に行ったアンケートによると、美術館に全く行かないと回答した方が51.7%もいるという結果だった。若者の美術館離れが進んでいるのかと感じた。帯広美術館の令和7年度の目標値は前年度実績よりも高く設定しているが、それは例えば、若者が来ないけれども若者以外の来館者が増えているという実態があるからか？それとも、帯広美術館は若者も含めて来場者が増えている、今後も増やしていくという目標値なのか？そうしたところの実態や考え方について教えてほしい。

事務局：まずは、冒頭に教えていただいたアンケートの調査結果については、ぜひ、読んでみたいと思う。来館者の年齢層については、先程のアンケートの話にも繋がってくる

が、アンケートの結果では年配の方が多くなっている。ただし、先程も御説明したが、アンケートの母数そのものが少ないので、実態は正確には掴めていない。ただし、この数ヶ月間の様子を見てみると、やはり御年配の方が多いと見えている。また、来場者増のターゲットを御年配の方や若者に寄せて考えているのかというお話については、美術館に期待するニーズがそれぞれ違うと思っており、バランスを見ながら両方にアプローチする必要があると考えている。

委員：令和7年度の計画の中に既に観覧者数の記載があるが、その人数はどのように算出しているのか？それから、資料27ページの令和7年度の評価指標のうち、「⑪教育普及プログラムの実施件数」について、令和6年度の実績は81件に対し令和7年度の目標は79件とマイナスになっているのはなぜか？

事務局：1つ目の計画の段階での観覧者数については、過去の同程度の展覧会を参考に記載している。2つ目の教育普及プログラムの目標値設定になるが、目標値の設定の考え方はこれまでの考え方を引用しており、過去5年実績の平均で設定している。実績を見ると令和5年度の数値が大きく落ち込んでいるので、そのところに数値が引っ張られて、昨年度の実績より少し低い目標値になっている。

(4) 高校生等の美術館等利用促進重点期間の設定について

(4) について、事務局より報告。

(5) 協議・意見交換

委員：委員の就任は今回で2期目。以前は長期目線の話をしていただいた。オンラインやQRコードの活用など、私が以前に発言してから変わってきていると思っている。今後は生成AIの活用。美術館で言えば、私が知る限りでは、1～2年前に開催されたオルセー美術館（フランス）でのゴッホ展で、人が話しかけるとAIゴッホの顔が動き出し、質問に対して答え、注目を集めていた。やはり、帯広美術館として、オンラインやITの活用を、中・長期ビジョンで考えていただければと思う。一般的にマイノリティと言われている障がい者や外国人に、例えば、言語に関係なく、質問したら答えてもらえる。先程、年齢層の話もあったが、AIであれば年齢層に合わせた言葉での回答もできるので、全てに対応できると思う。なおかつ、深い知識を得られるので、美術館に来たいと思ってくれると思う。少しコストがかかるが、クラウドファンディングを使えば、お金集めもできる。単純なAIだけでは物足りないので、VRも使い、映像が目の前に現れ、人の目で見るのと同じように見えれば、小さい子どもも興味を持ち、観覧者数も増えると思う。

委員：私は、今年の5月まで社会福祉施設のポップケで絵の展示を担当していた。退職し、自分の持っているアパートをリノベーションしてギャラリーを作った。オープンしてからまだ数日しか経っていないが、色々な人に見てもらうにはどうしたらいいかと運営上の勉強になる。ポップケは福祉施設であったため販売が出来なかったが、今のギャラリーでは販売が出来る。色々な人に波及効果があるようなこととはどういったことなのか、皆がどのぐらいの金額だったら使ってくれるかということを考える。芸術作品にかかる費用や所有については皆さん興味を持っている。以前、札幌の芸術の森でアートフェアが開催されたことがあったが、そうした、多くの市民や道民とつながるよ

うな工夫が必要ではないかと思う。

委員：東京の大きな美術館に行くとはたくさん来て、有名な作家の作品を見ることが出来るが、一方で、帯広美術館で昨年行われた星野道夫展や今年の中島みゆき展を観覧したが、それはそれで地元ゆかりの方の展示で、すごく楽しめたというか、いい企画だったと感じた。やはり、地方にある美術館の役割は、展示の数では圧倒的に大都市の比較にはならないので、工夫して展示することは非常に良いと感じた。また、先程お伝えしたように、若い人達の美術館離れが非常に深刻というか、残念だと感じている。やはり、子供の頃に美術館に触れる入れる機会が少ないと、大人になって急に好きになるっていうことがあるかもしれないが、大多数ではないと思うので、やはり、子どものうちから美術館に足を運ぶ機会が増えると良いと思う。具体的にどうしたら良いかということをお皆さん悩まれると思うが、私も、良いアイディアが思いつくといいいのだが、例えば、若い作家さんとかクリエイターさんの展示を行うとか、今までも行ってきたと思うが、高校生ボランティアの募集ということも、より進めていかれたらいいのかと思う。あとは委員として何が出来るのかと考えると、宣伝ぐらいしかできないが、例えば、私たちにチラシを送っていただく際に余分に送っていただけたら、近くの学校とかに持って行くとか、何かそうした取組も御検討いただければと思う。

委員：私は教育大学で美術教育を担当しており、美術教育ということについても、色々と考えたりしてきた。実は、釧路芸術館と釧路市立美術館の同じような会議に出席させていただいており、道立館での運営に関しては初めて参加させていただき、大変勉強になった。釧路芸術館、釧路市立美術館、それから、道立近代美術館のリニューアルに向けての検討会が設けられているがそちらにも参加させていただきながら、色々なことを考えてきた。そうした中で、それぞれの館で似た感じだと思うところもあるし、違うところもあった。先程、観覧者の話が出た。釧路芸術館は経営スタイルが違っている。館の運営は指定管理者が行っており、かなりシビアにこの観覧者のデータが取り上げられている。一方で、その観覧者数がすべてのその成果ではないなとも思うところがある。観覧者を増やさないとならないということと、経営的な側面もあり、この文化施設の評価の仕方というのは難しいものがあると考えている。先程、目標値の作り方などのお話があったが、例えば、過去5年間の平均値や最大値をもって新しい目標値をつくっているということだが、一方で、人口減少が進んでおり、特に釧路市においては人口がどんどん減っているのです、右肩上がりに目標値を設定できないということがある。また、いわゆる少子化でどんどん子どもが少なくなってきており、前年度を上回るような児童の観覧者数の目標設定が非常に難しい。母数が少なくなっているのです、人口動向のデータをうまく考えながら現実的な目標値を設定していくことが必要かと思う。先程、若者の美術館離れという話があったが、これは今に始まったというよりも、恐らく以前からそのような感じなのではないかと思う。15年位前の学生の調査では、やはり若年層の利用が少ないという結果。恐らく、学校を卒業し働く。働きに行くので簡単に言うと余裕がないということだと思う。逆によく美術館を訪れる方は、一段落して美術館に行こうかという余裕がある世代だからではないか

と話をしていた。一方で、学校で勉強して美術に慣れ親しみ、さて卒業してからという時に、その流れが途切れてしまう。学校を離れると美術から疎遠になってしまうので、そこを何とか、うまくクリアできないものかと色々考えたりもする。全国の美術館で考えてみて、なかなか解決しないので難しい問題ではあるかと思っている。今回のサンリオデザイナー展を拝見して、賛否両論があるが、例えば、今回の展覧会も含めて、いわゆるサブカルチャーの展示が多く、美術とか絵画とか彫刻という、いわゆるファインアートと呼ばれるような展示が比較的少ない状態。釧路芸術館では現在、さかなクンのギョ 苦楽展を、釧路市立美術館では海洋堂フィギュア展を開催しているので、この時期だけ見ると、道東地域ではファインアートの展示はすごく少ない。サブカル系の若者に好まれるような展覧会も1つの手だと思う。若者を引きつけていくという意味で。そうすると、熟年層の方々からは、伝統的な絵画や彫刻の展示も行っていて欲しいと言われるわけだが。そうしたバランスをうまく使い分けていって、満遍なく、観覧者を増やしていくということが必要になるのかと思った。そうした意味で今回報告があった高校生限定での常設展の無料はとても面白い。帯広美術館に来た人は確実に高校生であるデータが取れるので、このデータを基に、どの程度の人数が来たのかという分析を次年度はできると思うので、大変期待している。色々と同じような美術館共通の悩みや課題を道内の美術館で共有しながら、いい方向を探っていっていただきたいと思う。

委員：年代によって多種多様なニーズがある中で、色々な展示を企画される美術館方は大変だろうと感じている。商工会議所では諸先輩から、道立帯広美術館は経済界も含めて、みんなで誘致活動を行って設置されたと教わってきた。この美術館が30周年を迎えた時、商工会議所も100周年を迎え、令和3年度に水木しげる展を共催させていただき、若い人も家族ぐるみで展示を見に来ているのを直に見た。私個人の話だが、この協議会に参加させていただいているが、美術にうとく、あまり得意ではないので、以前は美術館に足を運ぼうと思うことは無かったが、仕事の関係もあり、訪れてみたら意外と楽しいことが分かった。先程、佐々木委員も発言されていたが、展示室の出口に各地の美術館のポスターが貼ってあり、どこの美術館で何を開催しているのかと見た時に、釧路での海洋堂展を知り、行ってこようかと思った。やはり、来る人がニーズをどこに置いているのかではないか。若者の美術離れという話もあったが、今の若者は単純に美術館に遊びに行きたい方もいるだろうし、当然勉強している方もたくさんいるだろうし、様々なニーズの方をどのように引きつけていくかということに尽きるのではないかな。

委員：私は小学校から高校まで、なぜ美術という授業があるのだろうと思う人間だった。仕事もNHKの報道局で災害や政治の世界などの話の中に長くいたので、こうした立場と真逆なことをしてきた。今日はサンリオデザイナー展を見て、こんなことがあるのかと色々気づいた。美術は見ないと分からない。私は食わず嫌いだった。やはり、見ると考えが変わってくると思う。私はNHKに勤務しているが、息子たちは誰もテレビを見ない。彼らが見るのは、やはりSNSです。単に面白いからすぐ食いつく。ですので、素晴らしい技術があるということや、ちょっと寂しい気分の時にS

NSを見て、こんな素敵な話があるのかとか、キティちゃんの顔が見えるとか、SNSもうまく使って、知ってもらうことが出来たら良いのではないかと思います。NHKでは10月から、テレビとインターネットの情報量を同じにするという話がある。美術館もどんどんデジタルの世界に情報を出していったら良いのではないかと思います。あと1つ。提案でも何でもないが、本日、招待券をいただいた。これは特別感があって嬉しい。美術館の経営的に難しいかもしれないが、もし、少し多くの方に配布すれば、もらった人間が私だけ特別だと感じ、リピーターになるかもしれない。

委員：帯広育ちで、教員も帯広第五中学校からスタートした。五中も緑ヶ丘地区が近いので子どもたちを連れてきたという経験もあった。美術館では、各クラスが順番に説明を受けて、展示を鑑賞させていただいた。そして、美術館のあとに動物園に行くという流れだった。ただ、こうしたことも今は教育課程の編成も含めて難しくなっているのではないかと思います。現在、帯広市立西陵中学校で勤務しているが、職場体験の受け入れなど様々な面で美術館にお願いをするということもあろうかと思う。そうした所で美術館に興味を持った子どもたちが関わっていけると思っている。観覧者数の推移を見ると、開館当時や令和元年度が多い。開館時は新しい施設なのでワクワクドキドキして訪れた方が多かったと思うが、令和元年度はどのような展示が行われたのだろうか。そこにニーズがあると思う。中島みゆき展を私も見させていただいたが、すごい数のお客さんだったし、販売の部分もすごく賑わっていたと思う。やはり、そこにニーズがあるからだと思う。先程、AIやSNSの話も出たが、帯広市のLINEがある。これが以外と皆さん登録している。暴風雨で停電になり全く情報が得られなかった時に、勤務する学校が避難所になっていると携帯電話に連絡が届いた。その情報はどのように得たかと伺ったところ、「えっ、帯広市のLINEを登録していないの?」と言われてしまうぐらい。そうしたところでどんどん情報の発信ができるのではないかと思いますので工夫していただければと思う。

委員：私は50代後半から絵が好きで絵画をはじめた。自分には何が向いているか分からないので、水彩画や日本画など色々なジャンルに取り組んでいる。美術館の運営についてはあまり良く分からないが、帯広美術館では、プリントアートの収集を一生懸命取り組まれているとのことなので、有名なミュシャのプリントアートについて伺いたい。こうした作品はどのように美術館に届けられるのか。プリントされた完成品が送付されて来るのか、或いは、デジタルデータが提供され、美術館で出力しているのか疑問。また、作品の紫外線対策を含む展示や保存方法について教えていただきたい。例えば、UVカットガラスの使用や、経年劣化はどのくらいでおこるとか、美術館としてどのような対策と管理を行っているか、差し支えない範囲でお聞かせいただきたい。

事務局：まず、1点目の作品の入手経路だが、プリントアート、特にポスターの作品は複数制作されているが、当時制作され印刷されたものを、多くは画廊を通じて購入、もしくは持っている方から寄贈いただき、美術館に作品として納められる。2つ目の作品の保存になるが、まず、展示室には一切の窓はなく、外光を全く入れないということ。また、窓ガラスには紫外線対策を施しており、更には、ライトにも紫外線

が出ないような技術改良されたものを用いている。ただし、作品は物なので経年劣化をどうしても避けられない。なかなか対策を行っていても、例えば、光による退色もしくは汚損。一番気を配るのはやはりカビ・虫。美術館というのは、劣化をできるだけ防ぐというか、守っていくことが主眼であり、そういった要素を限りなく排除した上で、収蔵庫へ保管する。そして、機会に応じて、皆様の目に触れるよう展示を行う。なるべく、100年、200年後も、今と同じような状況で作品が保たれるように、気を配っている。

委員：浦幌町には高校がないため隣の池田町の高校に JR で通う生徒の話だが、帯広美術館に行こうとすると、学校帰りに浦幌町とは反対方向に向かう JR に乗りバスに乗り継ぎ、閉館ギリギリの帯広美術館に到着する。帰りは、18 時の JR を逃してしまうと 21 時までない。こうしたことを考えると、帯広市内の子どもたちは路線バスで美術館に行かれるが、浦幌の子は絵が好きだけれども、美術館に来たくても来られない。いつか大人になったら美術館に行けたらいいなと考えているという子どもが実際にいる。こうした交通要件を考えた場合、教育行政でできることには限界があって、色々な首長部局と連携をとりながら、こうした子どもたちが自由に美術館に来て鑑賞機会を与えられるように整備していくことが重要だと思う。若い人たちへのアプローチという課題はもちろんあるが、もう 1 つはこうした課題もあるので、ぜひ、広域的な行政課題として取り上げてもらえるよう働きかけていただきたい。浦幌の地域課題としてもう 1 つは子どもの居場所づくりが大きな課題。放課後の子どもの過ごし方、部活動の地域移行を含めて、今後学校だけではなく地域全体で子どもを育ていかなければならない。従来そうした課題は、スポーツの部活を中心に考えられていたが、美術系や文化系の活動についても子どもたちの居場所がない。学校に馴染めない子どもの中には美術や文化に関心が高いこともある。博物館ではなかなか学校に行けない子どもへのアプローチなどの取り組みを少しずつ進めている。美術館に足を運んでもらい企画展を見てもらうのは非常にベーシックな活動だが、美術館でも色々な実践例が出てきている。地域のこうした子どもたちの活躍の場として美術館を活用していくことは非常に重要だと思っている。美術館の方から向かっていき、そうした子どもたちに対する創作活動の助言をすとか、美術部の活動を支援する、そうした活動の発表の場とするなど、美術館を活用してもらって併せてコレクション展に親しんでもらうだとか、色々なアプローチの仕方があると思う。福祉だとか他の領域に跨がる社会課題だが、課題解決に向けて教育の観点からもこうした可能性があるのかと考えを提起していくことで、いくつかでも取り上げていただけると、より美術館の利用が高まっていくのかと思う。最後は、昨日、東京国立近代美術館に行っていた。国立近代では、いわゆる戦争中のプロパガンダ芸術をいろいろ集めて、今年が戦後 80 年ということで時代を検証するというような企画展が開催されている。帯広美術館の場合、コレクションの性質からなかなかそうした社会課題と直結する形の展覧会を開催するのはこれまで行われなかったと思うが、例えば、バルビゾン派のコレクションで舞台となっているフォンテーヌブロー森林というのは、典型的な里山で、伐採と保護の歴史を繰り返してきている。それは現在の地球環境で温暖化の問題とか、森林の伐採の問題とかで実

は直結している景観構成要素でもあるので、そういった里山の減少と今日の温暖化というのは非常に結びついているので、よくバルビゾンの作品を見ていると、その過程の景観が克明に描かれている。そうした分析を通じて、今の社会課題とこのコレクションを結びつけるような企画も1つは立てられるので、地域課題・社会課題とコレクションの結びつきを視野に入れた企画の立て方もひとつ検討されてはいかがかと思う。

委員：先程、サンリオデザイナー展を見せていただいた。私は展覧会を見ても心に残ることが少ないが、サンリオの強さは、誰でも描けることと解説に書いてあり、「なるほど」と思った。これが美術館であったらばどうだろうかと考えた時に、難しいこともあるだろうが、誰にでも知ってもらうことと、誰にでも来てもらうことではないだろうか。そうした意味で、来館したくてもできない方に対するオンラインによる取組を続けていくことも大事だし、高齢の方、高校生と、色々な年代の方々に利用してもらうために、色々な工夫や様々な普及活動をすることで、多くの方に知ってもらうことが大切だと思う。自分の課題でもあるが、多分、学生の中には美術館が存在することさえ知らない人もいないのではないかなと思う。既に取り組まれているが、そうしたところから、地道に続けていくことが、これからの美術館の在り方の基本なのかなと思う。

委員：委員の皆様方から、様々な美術館に対して検討や工夫していただきたいことなどが挙げられた。出来ること、出来ないこと、色々あると思うが、まずは検討なりどうしたら上手く出来るかと考えていただくことが、美術館活動の活性化に繋がっていくと思うのでよろしくお願いいたします。2、3年前ほどから学校現場では「ウェルビーイング」という言葉が使われている。なかなか分からない言葉だが、簡単に言えば、児童生徒、或いは教職員にとっての幸福度。例えば、児童生徒であれば学校に来て楽しいだとか、学校に行くのが好きだとか、そういった気持ちになれるかどうか。教職員にしてみれば、学校が働きやすい、或いは働きがいがあるとか。こうしたことを「ウェルビーイング」という言葉で表している。そういった意味で言えば、児童生徒・教職員も同じかもしれないが、美術館であるとか、文化芸術に親しむのは、それぞれ個人のウェルビーイングに繋がっていくのかと感じている。こうした意味で、美術館で行っている教育普及プログラムの推進については、ぜひ積極的に取り組んでいただきたい。残念ながら、私の町の学校もまだ、活用していなかったような気がするが、こうした部分で協力しながら、美術館活動の活性化の一助になればと考えているので、よろしく願います。

委員：1点だけ紹介させていただきたい。先程、遠隔地から美術館に行かれない、時間的な制約がある中で来館が難しいという話があった。ヨーロッパでは、親と子が一緒に美術館を訪れ、会話しながら楽しめるよう遅い時間まで開館するナイトミュージアムに取り組んでいる。イギリスなどヨーロッパには何ヶ所もあるので、そうした対応も参考にしてもらいたい。